

北極星は光り輝いていた

福岡県 杉本清一

人生五十年時代に生を享けましたが、現在八十歳で至って壮健で、欲を申せば聴覚が衰えて「難聴だけ」が一つの欠点です。他は申し分無しですべてに感謝の心で毎日を送っています。

私は、父杉本徳治郎の長男として出生しました。弟五人、妹四人の十人兄弟でした。筑後地方は隣近所の方達は皆さん親切で、人情味の深い人間らしい交際の中で成人しました。

家は農業で一町五反歩を耕作していました。当時の筑後地方の農家としては大作農家でした。農

繁期には、俗にいう猫の手も借りたい位い繁忙でした。私も幼少時より、家事、農作業の手伝いを充分行いました。小学校は人生教育の基盤です。「教育勅語」を旨として、先祖を敬い、親に孝行を尽くし、兄弟仲良く、隣人と調和して特に筑後の住人は人情味豊かで、善人集団の土地柄でした。故人曰く「三つ子の魂、百までも」のごとく、児童教育はいかに大切かでした。

私は昭和八（一九三三）年三月、清水尋常高等小学校を卒業しました。農繁期には幼少の弟妹と家事に協力し全員で働きました。両親が小学校卒業時に「旧制中学校へ進学せよ」と薦めましたが、弟妹の多い家庭のことを思えば、それはならず、進学を断念して「高等科二年・卒業」で終了しま

した。そして農繁期には充分農業に従事し、農閑期には、町内の明治初年創業の茶業問屋にて働きました。特産の八女茶の製茶研究所などで先輩に指導、教習を受けながら一生懸命に働きました。また夜間は青年学校にも通いました。当時は軍隊に行くことが当然でした。そのため青年学校で訓練と予備知識を充分修得していることが自分のためであり、ひいては世間社会のためでした。

昭和十四年秋頃でした。役場にて同年徴集の「徴兵検査担当者」が集合した。翌日、三橋村小学校にて挙行される徴兵検査に当って、万事遺漏なきようにと指示の説明がありました。緊張と厳肅な気持ちで臨みすべてが終了しました。徴兵執行官からはくじの第一番で真先に「杉本清一・甲種合格」と告知、発表されました。私は「復唱！ 杉本清一・甲種合格」と復唱して万事終了でした。

数日後、役場の兵事係より連絡がありました。「兵科は陸軍砲兵科です。入営期日まで充分身体に注意して万事遺漏無きようにせよ」でした。

昭和十五年五月中旬でした。「広島県広島市、東公園に集合せよ」と通知が来しました。当日は同時刻前に現場へ到着しました。受付所には将校、下士官、兵隊数人がおり、入営通知状を渡して、点呼を受けました。身体検査も良しでした。この身体検査にて病気発覚、とくに性病等があると即日帰郷という、出征者に対しては一番不名誉なことになるのです。

そして「ただいまから衣服を支給す」といわれ、着衣を全部支給の軍衣類と交換しました。襦袢（シャツ）、股下（ズボン下）から褌を除き軍服上衣、下衣、帽子、靴下、靴（編上靴）等々ですべて新品を支給され着用しました。そして帯革を腰に着用。さらに雑のう（かばん）水筒と飯盒が支給されました。

指揮官が「貴様達は同年兵の戦友だ、すべて運命共同体だ、共に協力して目的に向かうのだ、よいか」で出発となりました。関西、中国、四国、九州と、一応西日本各地から集まった精鋭でした。

海軍基地である呉港から貨物船に乗船、出航しました。その時は行先不明でしたが、玄界灘から老岐、対馬海峡を経て日本海から北朝鮮の羅津の港に入って上陸しました。

海は穏やかでしたが船酔いに苦しんだ者も多数いました。羅津駅にて国防婦人会の皆様が迎えに来て下さいました。湯茶の接待があり水筒を満タンにしました。そして小粒ながら立派な林檎を各人に一箱ずつ頂戴しました。あの親切心は現在も心に焼き付いています。列車はここから北進しました。鮮満国境の豆満江（図們）を通過して満州へ入り、さらに北進して牡丹江省穆稜（ムーリン）に到着しました。部隊は関東軍直轄の「独立重砲兵」兼松部隊でした。

兼松部隊長は「貴様達は関東軍直轄の皇軍戦士だ。他部隊及び各兵科兵士の範となるべく精励せよ」との訓示があり、翌日から初年兵教育の開始です。教育係将校と助手として下士官及び補助員の古年次兵数人が教育係でした。第一期の検閲ま

ソ戦を考えてのことと思います。これはまたノモンハン事件の二の舞を踏まぬためだったのか、ともかくにも国境地帯には充分注意の目が光っていたのでしよう。

さて本科である重砲の事ですが、誤りもあると思います。次がそうです。

九六式一五センチ加農砲が優秀な武器です。飛耐獲（飛弾距離）二万メートル。一個小隊に各四門所持してました。兵員配置は砲手が第一番から第三番まであり、第一番は発射手で、第二番砲手は目標指示、第三番砲手は観測です。観測係は砲の位置より他の地点にあつて、三角点観測といつて砲と敵（目標物）とを横手方面から観測出来る地点にあり、それぞれを結んだ三角形地点にて照射（照準）計測をして、第三砲手または第二砲手、時には直接第一砲手に連絡して指示を行います。

その後は第二弾着、第三弾着を正確に観測、確認して砲手に報告し指示を行います。なお砲座付

で元氣一杯頑張りました。

「重砲兵操典」から「作戦要務令」その他の典範令から日常守則に至るまでよく勉強しました。夜間は常夜灯の仄暗い明かりの下で一生懸命に勉強しました。

全般的な教育を経て重砲兵独特の訓練が連日にわたり行われて第一期検閲が終了しました。自分の所属は第一中隊・第一小隊で、小隊長は久留米出身の小在捨夫少尉殿、班長は前川伍長でした。当時は私的制裁は禁止されていましたが、夜の点呼後にはかなり古年次兵が荒れていました。自分はいつも班長の呼び出し（小隊長の声掛け）で難を免れました。

ここはソ連との国境に近く、東寧の正面に久留米第十二師団が駐留していました。この部隊には友人知人が多勢いたと思います。関東軍の虎の子師団で剣兵団と呼称されてました。

我々も同じく国境近くの水分河において、訓練の名目で約一カ月「陣地構築」を行いました。対

近には部隊幹部（責任者）がいて、各発射弾について「採点、指導」を行っていました。弾列は十余人で組織され「弾込め」や搬送等に当たります。一個分隊は分隊長以下十五人余。一個小隊は小隊長以下六十人位で編成してました。移動は砲身車、十トン牽引車と、砲架車でこれも同じく十トン牽引車です。積載や載下等はすべてクレーンで行いましたので肉体的には非常に気楽でした。

信管の切り方には精神を統一して、細心に注意の上にも注意を要しました。瞬発信管は木の葉に触れても破裂します。着弾信管は着弾と同時に間髪を入れずに破裂します。退延期信管は目標物に着弾後数秒か数分後に炸裂します。また榴散弾は砲身を平射角にして

「自覚覚悟の射撃です」。眼前に現れた敵に対して最後の発射弾で「弾着零メートルです」。

以上のごとく、それぞれ利用目的が異なりました。毎日毎日このような訓練でした。陣地侵入、開脚、砲身転稼と一分一秒を競い、しかも正確が

目標でした。肉体的には至極気楽でしたが、神経は研ぎ清まされた日本刀のごとくでした。

昭和十六年八月、「関東軍特別大演習」が満州全土にて行われました。日本全国からも大動員され、現役兵の外に予備役や一般補充兵からも多勢の人たちが動員されました。関東軍百万人と豪語されたことでした。そして各師団、各部隊はそれぞれ兵員増加のために諸設備の割り増しに大変でした。半地下の急造兵舎を造り、それぞれにベットの割り増しとなり、それに伴い各兵器廠や被服廠も大変だったとかいわれていました。

我が隊の演習には、関東軍から将官をはじめ多くの武官が実弾の射撃威力を見学に訪れられました。担当武官は陸軍中将・内山栄太郎閣下でした。九六式十五センチが加農砲の威力を發揮するのはこの時とばかり。自分が第一番砲手で第一弾を発射しました。弾道は尾を引いて中天を走る。わずか数秒後、仮想敵陣地の「目標命中！」の観測の声に、並みいる将校団全員が双眼鏡を目にしたまま

弟は……」と想いを走らせる時が一番苦しかったでしょうか。

昭和十七年十二月二十五日、満期除隊で二年八カ月の勤務も無事終了し「現役満期徐隊」で舞鶴港に凱旋し一目散に自宅へ帰りました。

以後、大牟田市の三井金属アルミ工場に勤務し熟練工員として働き、第二の召集免除でした。終戦後は農地委員を拝命し、農地開放業務を行いました。また県特産の「八女茶」の品質改善・茶業振興等に努力しました。

「見事だ、天晴れ也」やんや、やんやの喝采でした。

内山閣下「殊勲甲に値する。砲手は誰か」に小隊長が「杉本上等兵です」と答え、閣下が「よし、後刻、賞す」でした。その後中隊長殿から呼び出しがあり

「杉本、内山中将閣下から賜わる、一週間休養だ」でした。金の無い兵隊さん一人に一週間の休養を賜わったところで……。結局一週間、班内にて起居し、酒保にて鰻頭を購買するぐらいなのでした。

軍隊においての労苦体験についてのお話ですが、自分には労苦の思い出は一切無いです。六十五年も昔のこと、苦は楽の種で、苦しかったことはすべて忘却しました。楽しいことのみ思い出として脳裏にあります。

特に取り立てて申し上げれば、衛兵勤務の際、動哨（部隊の中外を監視警戒する任務）勤務中の深夜に満天の星空を眺め、また払暁時に東天の白む頂など、故郷を偲び「今時は、今頃は」「親や兄

北方警備の戦車隊

福岡県 三小田 隆 憲

私は、大正十一（一九二二）年二月十四日、三小田家の長男として生まれましたが、父は私が四歳の時に死亡しましたので、母一人子一人となりました。母の実家が嫁いだ家から直ぐ近くだったので、祖父母、そして母の兄である叔父さん叔母さん夫婦には子供がいなかったもので「一緒に住まないか」と言われて同居することとなり、一家六人家族となった訳です。

子供は私一人でしたので、皆から可愛いがられて養育され、町立大江小学校に入学、小学校を卒業すると旧制中学校伝習館に入学しました。その後さらに三池工業二部採工部に入学し、二年間の実習を経て昭和十六（一九四一）年三月に卒業しました。

そして日本製鉄の大治工業所に就職することに